

2/4

April 10th (Sat)

移動者は十一時昼飯、十二時 Recreation Hall
に集合のこと。

出
発
の
方
向
は
。

舎内は、まるで空洞にも等しい威だ。決意の裡にも
憂色か全員が面に掩ひねもしく、流石に無駄口を
きくものは少ない。何んと悲壯な光景だらう。舎を去
るに臨み、惜別の握手が其処に処に取交は
され、男泣きに泣くも哀れだ。Mailが續々運ばれ
讀了後、だれにも目を真赤にしてゐる。僕は握手にあ
り物言や事を持ち、一言二言と漸く述べ終るに過
ぎない。

正午十二時、バブワイヤーの gate に添ひ雲集する。旗
に識別の文字と認め、何れ舎からの人員諸君か歓声と
共に送って笑れる。友は来て引っぱりおの握手だ。
寝て、A. B. C の順序で姓名を三厚助役か
讀み上げる。其の意にて呼ばれた人々は、一人宛
宛に gate を出て順次一列と成る。伊太利人の
収容区域に。其処から又 gate から出て Recreation
hall へ送り込む。其処で手探さ及び身辺搜索がけられ
るため、一人死ねはれると見て大妻お手肉取り方で
ぬ。二時とあり三時と成るも容易に川原が来ない。
初夏の日射に立って、苦みは相成るものだ。漸く
Sidewalk の芝草に腰をおろすかお米老人
連は一呼吸つくつてゐた。最初三時乗車、六
時半出発の、豫報だったか、此調子では連も家

215

定通りはりくとも思はれん。果に検閲人員を
遠く増加するに至り、~~数~~ 数名の兵士が其
の仕に當る事になった。急速で伊太利人
区域からあの gate を通過し recreation hall
前に達する。~~その~~ Hall の玄関口に一兵卒毎が
四五名立ち並んで、手提袋や衣服のポケットを一つか
ら探す。流石兵隊だから、移民の真のやうに、くどくど
とは無い。僕はポケットから pipe cleaner と毛抜とを
差出して渡した。タイプは絶対に許さぬが預ける事に
なつてゐる。此処をパスすると内部入口近くに
移民官と下士らいつか、ジロジロに居る。

送り出しの荷物の個数と前記の預託が type
white で記入された ~~書面~~ 書面は三通か四通
にまた署名した後、~~手~~ 二通と指紋や写真
を貼付け付けた書面三通か四通にまた署名
する。次で別の正面及び側面の写真貼付
の紙面と本人と見比べる後、手續終了
となる。館や、バンケに漸くホッとするのは
何時間後の事だ。是れで吾らは移民
官から陸軍の監督下に完全に移されたわけだ。

ホールの各出入口には、小銃を持った衛
兵が、のんびりと吾らを監視して居る。捕虜の
気分が、ちよんぽりと感じられる。

やがて全員の検閲が済むと、復又 a b c 順
で姓名が讀み上げられ、其の處に各自は館

2/6

外の廣場に整列するのである。坪井君の如き病人
を始め松葉杖に依る不肖者連は、既に夕食を了
へたのであらう、先考として自動車で運ばれた。

吾らの両側には二、三十名の兵隊が、小銃物々
しく護衛し一定の間隔を取って監視にゐる、すゝと
隊長の「突進」の号令一下、引合の者と共に
ガタガタと弾丸を込め銃を斜めの構へで、凡
そ連に、だがおら非戦闘員に對する此のチ
は既に市出費に際し体験済なけれど、僕ら
は更に動かし、恰も演習と目前に見えやうな
気分であるのは、木子居住民として毫も俯仰天地
に恥じないからである。

食堂へと繰り込む、兵隊は両側に並ぶ、
若し一兵でも轉んで弾が飛んできたら危険だと、
変な処へ淡々不安が起ったが安全解はらうて
ある筈だ。伊太利人収容所の前へ来ると、ニッポ
ンニッポンバンサイと彼等は声を張り上げて
大變な騒ぎ喧騒だ。一ケル近い伊船
員連は物凄く程の歡呼とロッキーマン脈も
開かれはかり、之に應ずる萬歳も引つき無。

食堂はじつと返へた、"むすび" = 個に卵焼
とピクルスを入れた弁当は汽車での夜食だ。

食後約一哩半ばかりと兵に護られ、信玄巻
に外巻を抱へ汽車迄の歩行だ。何れにも老人
連に加へて、何ヶ月かの監禁に長い道のりは、

2/7

がかりの苦痛だ。時折り、ぽつりぽつりと雨が
降る。伊太利人の歓声が再び起る。直路を
直にいい足と運ばは、構内の鉄軌道に沿って
残った同胞が手を振りハンカチーフを振り回して、
good byeを連呼する。中には泣いて居る人
達もはつきり分る。僕の名を呼んで声のつまる
友人の姿が、ちくちく右側に面と置いて見える。
浅場、永松両君の涙の顔が僕に別れを惜
んで呉れる。萬感といふが無量と称すべからず、
雲天のミゾラ収容所を後に、捕虜おらざる
捕虜の自分が、今將に遠き二千哩を護送
される境遇と看ると、この歩みも夢にはあらが
やと、たゞ無言の儘手を上げて居るだけの
ことだ。だが全身の血脈に鼓然として、勇気
の溢るを覚へずには居られぬ。

午後七時
ミゾラ収容所
出発

十何台の列車は、草率中の鉄路に連り
おらと待つてぬ。再び矢張り姓名順通り、いよいよ
乗車した。豫報の如く、一席一人が占める
やうに成って居たのは何よりだ、僕はワパト
の二村政市長と向い合せて席を取った。

午後七時発車。

過去四ヶ月隠忍のミゾラの舞会は、晩春の夕
霞に遠く連り、人影は見えず、ほのかに立のぼる
煙は炊事場か、取て心残りはないが、残る同胞
に多くの名残りがあつた。金地と残る連舞は

218

雨雲に變遷の氣柵をき何かお心と早くものが
ある。

発車向ともう人家が沿ひて異村の眼をもつて
おらを見送つてゐる男女の姿がある。二人の青年は
指と筆先を擴げて羨望の意を表すかと思へば、
或る賤が家のポーチに支物でもあらう、若い男女
の中、女が手を挙げて bye bye とする無心の手を男
は急に取つて引き下ろした。此時倅地だけに
敵愾心と共に、戦時に對する無関心か真にも非
戦時負たる在米居住者への同情とも見られる、或る
人間性の一立端が首と出ている。

車窓は次外にも shade を降ろさず、外望使自由は許
されてゐるのは何よりだ。

夜に到り下士官のきか處の造りの寝台組立て方
を教へてくれた。即ち二席の中間に一席の背床と技
きと、挿はさむと忽に二人並んで寝られるのだ。
在米三十年初めて知つた事だ。とはおらに對する
軍需の厚意と見做さんや。

① 立ちおらお兵にかゝる実弾の
銃の林にわらわら発射けり。

② 萬歳の唄にいらへてはつ朝の
ミソウの春に雲立ちさわぐ。

③ 今に泣き割れんや戦ひの、いけにえとあり
泣き立つわれは。